

小野 知洋教授の紹介

小野知洋教授は、2017年3月31日をもって金城学院大学国際情報学部を定年によりご退職されました。

先生は1977年3月に名古屋大学大学院農学研究科博士課程単位取得満期退学後、同年4月に金城学院大学短期大学部専任講師として着任されました。その後、1991年4月には短期大学部学部長（～1995年3月）、1997年の現代文化学部設置においては中心的に参画され、2005年4月から現代文化学部長（～2009年3月）、また2012年4月から改組後の国際情報学部長（2015年3月まで）と要職を歴任し、金城学院大学を文字通り牽引してこられました。



研究分野では先生は生物学（昆虫学）がご専門で、性フェロモンに対するオスの接近行動の研究からスタートされ、ジャガイモガという当時侵入害虫として注目されていた昆虫の性フェロモン、特にメスに対するオスの接近行動を研究。オスとメスが接近する際に、メスの鱗粉をオスが触覚的に認識していることを世界で初めて実証されました。

金城学院大学に着任後には、大学内の湿地環境に生息していたハッチョウトンボのなわばりをめぐる行動を当時名大にいた椿氏と共同で行った研究内容が国際的に高い評価を受け、多くの論文等に引用されているそうです。

アメリカ（マサチューセッツ州立大学）研修の機会を得て帰国後、ジャガイモガで保有性フェロモンの変異が生じる機構を明らかにした「ジャガイモガの保有性フェロモンの個体変異」を発表されました。行動生態学的な視点から、アオマツムシの繁殖システムを研究。交尾の際にオスがメス体内に保持しているライバルオスの精子を抜き取る行動があることを発見。精子の抜き取り行動の発見は、当時、トンボ以外のグループでは世界で初めてであり、今も多くの論文に引用されているそうです。

先生をマスコミ等でも有名にしたのがオカダンゴムシの歩行行動の研究です。オカダンゴムシの交替性転向反応について実験的な検証を行い、この行動が逃避行動としての意味をもつことを明らかにしました。この研究内容がテレビ番組などで紹介されたこともあって、書籍やインターネットなどでも取り上げられ、現在でも親しみと尊敬をこめて「だんご虫博士」と呼ばれています。

また近年では本学にある八竜湿地をはじめとする東海地方独特の湿地環境の歴史と変遷を総合的に調査されています。2013年に大学からの研究補助も得て、周辺大学等の研究者と研究グループを結成し、年代測定、地層、水質、花粉分析、プラントオパール、植物化石、昆虫化石、古文書などを含む総合的な調査を行うとともに、湿地環境の保全にかかわる提言をされています。この研究は定年後も調査継続を予定されているそうです。

生物学の泰斗としてだけでなく、穏やかで温厚な人柄で多くの研究者、学生から慕われ、また愛されてきた小野先生、今後のますますのご活躍を祈念いたします。